令和３年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立七尾高等学校

１　豊かな人間性と国際性の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。	・生徒一人ひとりが一日一善の精神で、他者に対して小さなボランティアを行う。 ・各部ボランティア活動「校内」「地域貢献」（随時）	【成果指標】 （生徒） 一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。	一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 Ａ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】前期は、生徒会からの提案で行うボランティア活動が主体であったが、後期は企画も含めて生徒が自発的に考える方法でボランティア活動を実施した。この取組方法が功を奏したと考える。 【今後の取組】今後も引き続き、生徒の主体性を育むボランティア活動に取り組ませたい。感染症対策を徹底しながら、積極的に地域に関わらせていきたい。
・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。	・「能登の里山里海」特別講座（１年） ・ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業（２年）	【成果指標】 （生徒） 「ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている」と評価した生徒の割合が高まっている。	４月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 Ｂ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】第１回アンケートより、どの学年でも評価が高くなっている。とくに１年生に著しい伸長があったことから、「能登の里山里海」特別講座が効果的であったと考えられる。 【今後の取組】取組直後のアンケートではそれぞれの活動において肯定的な意見が９割以上であったので、今年度の取組を次年度も継続して行いたい。
	・異文化交流 ・外務省高校生講座	【成果指標】 （生徒） 「異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が湧いた」と評価した生徒の割合が高まっている。	４月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 Ａ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】第１回アンケートより、どの学年でも評価が高くなっている。とくに１年生では、外務省高校生講座が効果的であったと考える。 【今後の取組】コミュニケーション英語の時間に、ALT による異文化理解を深めるための講座をもった。こうした取組が生徒の意欲を高めるうえで効果的だと考える。
学校関係者評価委員の評価	生徒の小さな善意や気づきを促してボランティアにつなげる「一日一善運動」は、社会で求められている力を育てるもので、高く評価する。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	「一日一善運動」をさらに充実させるとともに、小中学校での発達過程や指導の実態をふまえ、小中学校と連携しながら本校の学びの質を高める効果的な方策について検討する。				

２　進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進して困難な課題と向き合い考え抜く、粘り強い思考力を育成する。 ・生徒の可能性を最大限に引き出し、大学入試制度の変化にも対応できる進路指導を実践する。	・志を貫くためのキャリア教育 ・キャリア教育講演会 ・全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 ・学習時間調査 ・ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 ・進路情報の発信 ・進路講演会 ・難関大学入試問題解法研究 ・金沢大学入試問題解法研究 ・習熟度別学習指導（週末課題） ・スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 ・金沢大学キャンパスビジット等 ・京大サマースクール ・金沢大学による出張講座 ・保護者への進路説明会 ・学習計画の作成とチェック ・志望校群別検討会（２年） ・志望理由書の作成（１・２年） ・批判的思考力育成（３年） ・放課後の学習会 ・出願校検討会（３年）	【成果指標】 （生徒学年別） 第１志望に対して明確な理由がある。	高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して Ａ　１００％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　８０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 ＜生徒：１年生＞ Ａ ＜生徒：２年生＞ Ｂ ＜生徒：３年生＞ Ｂ	【判断基準】各学年目標 １年１００（５割） ２年１４０（７割） ３年１９０（８割） Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】学年に応じた進路学習で一定の成果が見られる。一方、将来の進路に悩んでいる生徒への継続的な支援が必要である。 【今後の取組】一層の進路学習の充実を図る。各種講演会や学問分野の研究をとおして、目的意識を高めたり、自己理解を深めたりするなど、各学年での進路学習を工夫していく。
		【成果指標】 （１年生生徒） 学習習慣を身につけ、成績を伸ばしている。	（進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較） 入学後、学力を伸ばした生徒が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１３０人以上 Ｃ　１３０人未満	【進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較】 ＜生徒：１年生＞ Ｂ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】偏差値６０～６５の層が薄く、５５の層の底上げが課題である。例年に比べ学習時間が大きく減少しており、学習習慣を定着させる指導が不十分な実態がある。 【改善策】 ・予復習の習慣など、学習を積み上げる姿勢の重要性について、授業の内外を問わず、学年全体での声掛けや授業改善によって指導を徹底する。 ・Classi の入力徹底を通じて、学習を中心とした生活スタイルの確立、自律的に学習する態度の涵養を図る。
		【成果指標】 （１年生生徒） 着実な学力形成を果たしている。 （進研模試１月）	１月進研模試での学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　３５人以上 Ｂ　２５人以上 Ｃ　２５人未満	【１月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：１年生＞ Ｃ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】Ｓランクの生徒数は７月から伸びているが目標値には届かなかった。 【今後の取組】 ・上位層の指導について情報共有し、個々の生徒に応じた３月までの目標を設定して学年全体で指導・支援を行う。 ・習熟度別課題の設定や添削・講座等の上位層指導を継続する。
		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較）	（進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較） ２年次に、学力を伸ばした生徒が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１３０人以上 Ｃ　１３０人未満	【進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較】 ＜生徒：２年生＞ Ｃ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】普通科普通コースの偏差値５０～６０の層での停滞が見られる。背景には家庭学習時間がなかなか増えないという実態があり、４月当初の学習習慣を定着させる指導が不十分であったと考えられる。 【改善策】生徒が学習を中心とした生活を構築できるよう、毎日学習時間記録表を記入させ、１週間ごとに振り返りの時間を設ける。

		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試１月）	１月進研模試３教科総合で学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　　３５人以上 Ｂ　　２５人以上 Ｃ　　２５人未満	【１月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：２年生＞ Ｂ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】Ｓランクの生徒の人数は７月から増えてはいないが、上位層は順調に成績を伸ばしていると考えられる。 【今後の取組】 ・習熟度別の週末課題の継続や課題の課し方の工夫を行うとともに、上位層への個別指導を行う。 ・志を高く持たせるよう、Ｓランクの生徒への指導を継続するとともに、Ａランクの生徒においても、個人面談を通して難関大学を目指させる助言等を行う。
		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試１月）	１月進研模試での５教科総合偏差値で６０以上の生徒が Ａ　　８０人以上 Ｂ　　６０人以上 Ｃ　　６０人未満	【１月進研模試５教科総合偏差値】 ＜生徒：２年生＞ Ｂ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】秋以降に３教科型の学習から、５教科型の学習への移行がうまくいっていない生徒が多いと考えられる。 【今後の取組】 ・習熟度別指導の改善を行い、授業での説明等や課題の量と質を、適切な負荷となるよう差異化を図る。 ・各教科で学習到達度を図るための小テストや問題演習、および予習復習のチェックのあり方を見直す。 ・教員の教科指導力と進路指導力の向上を図るため、担任会議や教科会議を活用する。
		【成果指標】 （３年生生徒） 個々の志望大学の結果による。 ＊スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。	スーパー難関大学の合格者が Ａ　　５人以上 Ｂ　　３人以上 Ｃ　　３人未満 難関大学１０大学の合格者数が Ａ　　２５人以上 Ｂ　　２０人以上 Ｃ　　２０人未満 金沢大学の合格者数が Ａ　　４０人以上 Ｂ　　３０人以上 Ｃ　　３０人未満 国公立大学の合格者数が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１４０人以上 Ｃ　１４０人未満	【大学入試結果】 ＜生徒：３年生＞ スーパー難関大 Ｂ 難関１０大学 Ｃ 金沢大学 Ｂ 国公立大学 Ｂ	【判定基準】大学入試結果で判定する。Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】難関１０大学の合格率は７割を超えている。合格率を保ちつつ、出願者数を増やすことが課題である。 【今後の取組】 ・低学年次指導を一層充実させる必要がある。３年夏までに必要な知識技能を定着させるための学習指導計画を再考する。 ・金沢大学のＫＵＧＳ特別入試の分析・検討を行う。 ・授業の効果をより高めるという視点で、各教科での授業改善を推進する。

学校関係者評価委員の評価	進路意識を高める方策の一つとして、卒業生から具体的な話を聞ける機会を設けてもらいたい。
評価結果を踏まえた今後の改善方策	コロナ禍のなかでもオンラインであれば生徒と卒業生が対話する機会の設定が可能である。前向きに検討する。

３　教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・生徒理解に努め、共感力と生徒支援力の向上を図るとともに、人間としての在り方・生き方を育む指導力を高める。 ・教職の専門性を基礎とし、教科指導力や学級経営力、危機管理力などの実践的な指導力の向上に努める。 ・校内でのＯＪＴによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。 ・GIGA スクール構想の実現に向けて、教員の ICT 活用指導力を高めることによって生徒の	・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付 ・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施	【成果指標】 （生徒） スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。	スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が Ａ　９５％以上 Ｂ　９０％以上 Ｃ　８５％以上 Ｄ　８５％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 ＜生徒＞ Ｂ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】生徒会によるネットトラブル防止啓発活動などが功を奏している。ＳＮＳでのトラブルは誰にでも起きうるものであるとの認識のもと、今後も啓発指導を継続する必要がある。 【今後の取組】新しい生活様式が浸透していく中で、従来のＳＮＳの注意喚起にとどまらず、Ｗｅｂ会議等のマナーやトラブルについて指導を継続する。また、今後生徒一人につき一台の端末が配られる。そのための使用ルールやマナーの指導について今後検討する。
	・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進 ・学習到達度に応じた予習・復習の取り組み方法の提示 ・Ｃｌａｓｓｉを活用した予習内容の可視化 ・予習チェックの呼びかけ ・「効果的な予習を促す」指導及び「多様な見方考え方が身につく」指導に関する教科内及び教科間での研究と情報共有 ・批判的思考力育成課題「知のよりみち」の更なる活用を図るために編集を工夫	【成果指標】 （生徒） 国語・数学・英語において「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が高まっている。	国語・数学・英語における「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が Ａ　７０％以上 Ｂ　６５％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【１２月実施第１回生徒による授業評価】 Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】「ややあてはまる」まで含めると８０％以上となることから、予習をする意識は定着しているといえる。しかし、継続的な学習習慣が確立されておらず、学習時間は十分ではない。その背景には生徒の生活の中でデジタル端末を利用した動画の視聴やゲーム、ＳＮＳの時間が多いという実態がある。 【改善策】生徒の到達度に応じて、予習・復習の提示の仕方や声かけを工夫するとともに、現在学年団で取り組んでいる生活改善指導の中から効果のあったものを、全体に波及させていく。
		【成果指標】 （生徒） 「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が高まっている。	「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が Ａ　６５％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　５５％以上 Ｄ　５５％未満	【１２月実施第１回生徒による授業評価】 Ｃ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】第１回のアンケートより改善が見られるものの十分ではない。授業の内容や定期考査の問題の多くが知識技能に偏っており、今後、思考力・判断力・表現力を育成するための発問や評価を工夫していく必要がある。 【改善策】各教員の授業改善シートから、効果があったと思われる取組を取り上げ、教科内だけではなく全体で共有していく。また各教科の研究授業においても、思考力・判断力・表現力を育む指導の研究を促す。
	・学年・教科を主体としたＯＪＴによる若手教員育成を推進する。	【成果指標】 （若手教員） ＯＪＴをとおして教員としての成長を実感できる。	ＯＪＴにより「教員としての成長を実感できた」・「ややできた」と答えた若手教員の割合が、 Ａ　１００％ Ｂ　９５％以上 Ｃ　９０％以上 Ｄ　９０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】専門性（教科・部活動）が活かせる業務に自信を持つが、経験のない業務（校務分掌・部活動）に苦手意識や負担感を感じている現状が窺える。 【改善策】校務分掌の業務については、主任が進捗状況を逐次確認し、アドバイスするなど主任やベテラン教員のサポートを増やすとともに、若手の意見を聞いたり取り入れたりするなど、若手が主体的に取り組めるような仕組みを検討する。

学びの変容を促す。	学校を挙げてGIGAスクール構想を推進する。	【成果指標】 （教員） ICTを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している。	アンケートで、「ICTを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、 Ａ　７０％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　５０％以上 Ｄ　５０％未満	【１２月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ Ａ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】日常的にＩＣＴ機器を活用した授業が見られ、生徒一人一台の ChromeBook を活用している授業も増えているが、教科や科目によってはその頻度や活用方法に大きな差が見られる。 【今後の取組】先駆的な取組の事例の学校全体での共有や教員同士の授業参観を促して授業改善を図る。
学校関係者評価委員の評価	・デジタル端末利用の指導は家庭の問題であるので、家庭に任してしまうことも考えられる。 ・ＩＣＴ機器の活用をさらに進めてもらいたい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	・ＰＴＡと相談しながら適切なスマホ利用について引き続き検討していく。 ・１人１台端末の本格的な活用に向けて、教員の研修を継続的に行う。				

４　魅力ある学校づくり

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・特色ある教育活動（第４期 SSH 事業、NSH 事業）を全校的に推進し、その成果の全国的な普及に努める。また、その活動・成果を地域の小中学生に広報し、本校の魅力として伝える。	学校設定教科「探究」の成果物等の他校への普及	【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。	本校の開発教材を使用した学校数が A　２０校以上 B　１５校以上 C　１０校以上 D　１０校未満	【成果指標】 C	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】直接提供した学校は１０校である。また、今年度刷新したホームページからの教材のダウンロード数はおよそ８０００件であった。このことから、新ホームページは、本校の成果の普及において、効果的に働いていると考えられる。 【改善策】ホームページを中心とした成果普及をさらに推し進める。これまでに開発した教材をまとめ、使いやすいパッケージとして提供していく方法を検討し、導入する。
	物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成	【成果指標】 （生徒） 全国大会相当への出場の決定数が増えている。	全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が A　４以上 B　３ C　２ D　１以下	【成果指標】 ＜生徒＞ A	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】昨年に引き続き研究関連の入賞や全国大会への出場が多かった。一方で数学オリンピックなど科学コンテストの全国出場者はいなかった。 【今後の取組】高いレベルでの研究活動を維持するよう、生徒の研究活動をサポートしていく。筆記試験をともなう科学コンテストは学習会を実施する。
	・英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進 ・複数年を見通した指導の構築	【成果指標】 （生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。	左記大会やコンテストに参加し A　優勝を含む入賞６件以上 B　入賞　５件 C　入賞　４件 D　入賞　３件以下	【成果指標】 ＜生徒＞ C	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】探究活動を通して課題研究コンテストに必要なスキルを育成しているが、今年度はその進度が大幅に遅れた。このことがコンテストへの応募数減少につながった。 【改善策】１年次の１月から課題研究を始めることで、コンテストの時期に間に合わせるとともに、社会に対する問題意識を育み、教科横断的に考えさせる仕組みを取り入れる。
	文系フロンティアコースに所属する生徒の実用英語技能検定２級以上における取得率の増加	【成果指標】 （生徒） 左記の検定合格者数が増加している。	左記検定における合格者数が A　４０人以上 B　３６人以上 C　３４人以上 D　３３人以下	【成果指標】 ＜生徒＞ C	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】昨年度より１年次の英検受験を必須としていないため、合格者数が減少した。 【改善策】日常的な英語学習指導により、生徒が自主的に英検取得を目指すよう取り組む。

学校関係者評価委員の評価	探究活動の先進的な取組が、全校挙げて行われていることを高く評価する。
評価結果を踏まえた今後の改善方策	問題発見・解決の手法や主体的に考える力を着実に身に付けられるよう、探究活動のさらなる充実に努める。

５　働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進め、教育活動の質的向上に努める。	・月２回の定時退校日と８月の閉校日を設ける。 ・最終退校時刻を意識して計画的に業務に取り組む。 ・長期休業中にまとまった休暇を取得する。 ・年休を計画的に取得する。 ・会議のペーパーレス化をさらに進めるとともに、効率的・効果的な会議運営を行う。 ・情報共有の仕方を工夫し、職員朝礼を原則として週に１回とする。 ・業務の平準化を図り、分業と協業の体制をつくる。 ・部活動の休養日を適切にとる。	【成果指標】 （教員） 業務の工夫・改善により効率化を図る。	業務の工夫・改善により効率化を「図ることができた」・「やや図ることができた」と答えた教員の割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ Ｃ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】昨年同時期のアンケート結果と比べて、４．７ポイントの減少となっている。超過勤務時間も昨年と比べ大きな変化は見られない。個人レベルの業務改善だけでは、業務の効率化は難しい現状が窺える。 【改善策】慣例的に作成してきた書類や恒例の学校行事、会議などを抜本的に精選する必要がある。主任の連携を中心とした組織的な業務効率化を進めるため、来年度の計画を策定する際には、学年や校務分掌の枠にとらわれず横断的な業務割り振りを検討する。
学校関係者評価委員の評価	完璧を求めすぎて業務量過多に陥ることのないよう工夫してもらいたい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	採点にＡＩを活用するなど、機械にできることは機械に任せるような環境整備を進めていく。				